OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

談　話　室

私の受けた一般教育

山　下　智恵子

教養部時代の講義内容については，ほとんど忘れてしまっている。思い出すことのできるのは，断片的なことがらで，例えば，日本国憲法の時間に話題になったアルカポネの裁判のこととか，「愛の哲学」，「結婚年齢の調査統計処理」などで，前後の脈絡のつかないまま頭に浮んでくる。

そのようなものの中で，ある種のいたみを伴なって思い出されるのは，公衆衛生学の一部分で聴いた「被爆の医学」だ。

九州で育ったために，昭和20年8月6日の広島原爆投下については，透明で平板な一枚のスチール写真をみるような印象しかなかった。

入学式の後，友人と市内観光し，広島城，縮景園，百メートル通り，元宇品公園，比治山，宮島などとともに，平和公園，平和記念館，原爆資料館も巡って歩いた。原爆資料館では，飴のようになったビン，瓦，変色しボロボロになった布切れ，ガラスの破片で傷つき血を流し，焼けただれた皮膚をひきずる人形，どの前に立っても，おどろおどろしさに息をのんだ。しかし，一たび屋外に出れば，市井の雑踏。時間が経つにつれて，しだいに興奮はうすらいでいった。私にとっては間接的な経験にすぎなかった。

公衆衛生学の講義は，大きな階段教室で行われた多人数授業だった。担当の田中正四教授は，医学部から，毎週この講義のために教養部まで出向かれていた。「被爆の医学」といった講義は，――晴れであった――という当日の天候からはいり，原爆投下後，広島赤十字病院の医師によって，地下室に保存してあったX線フィルムがすべて感光していたことから核爆弾であったらしいと推定された事実に及び，その後の被災者の治療に当った医師の体験，調査結果からのデーターを紹介したものだったと思う。

○○キュリー　被爆――嘔吐，下痢
○○キュリー　　――火傷，脱毛
　　⋮
○○キュリー　　――即死

被爆線量の増加に伴なって，確実に人体組織の破壊が増し，死に到る。しかも，その後遺症は，被爆後20数年を経過したその当時でさえも，血液ガンである白血病の罹患率が高いというような形であらわれているなど。

田中教授は，被爆の事実と，その人体への影響を，淡々とした口調で語った。

わずか数時間の講義だったと思う。資料館での見聞，市内あちこちに見られる慰霊碑，理学部裏面の風化したレンガ，学友の大声で叫ぶ「ノーモア・ヒロシマ」，ひそやかな精霊流し，短時間の私の貧しい体験が，地理的な広がりと，時間的な経過をも

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

って整理できたと思う。そして，一瞬の閃光のもと，熱線と放射線の束が，人を死に至らしめた因果関係が，私自身の脳裏に怒りを込めた痛みを伴って刻まれたように思う。

一般教育と私

渡　辺　節　夫

時のたつのは早いもので，香川大学に来て，もう4年近くがたってしまった。ここに来て間もなくの頃，この大学について一番印象的だったことは，一般教育についての議論が実に熱心になされていて，日常会話でもよく〝一般教育〟という言葉を耳にすることであった。4年もたつと，なぜ，こんなに一般教育ということが話題にのぼるのか，微妙で複雑怪奇な事情がそれとなくわかってきて，もう余り気にもとめなくなったが，しかし，自分自身が現に担当している科目という意味ではもちろん気にとめている。気にとめているというより気にとめることを余儀なくされているという方が正確だろう。つまり，細かい点まで気にとめ過ぎても，とめ過ぎることがないほど，私には苦手な，苦痛な教育なのである。

先日，大津で日教組の全国教育研究集会というのがあり，一般教育の内容的な位置づけをめぐって議論が沸騰していた。要は，専門の基礎教育という意味以外にどのような意味があるのか，専門教育とは全く別個の一般教育という独自の教育内容があるのかということであったと思う。それに関係していろいろな意見が出されたが，一般教育とは何か，よく考えてみると意外と難しいものだとつくづく感じたのである。私が，一般教育の教育が苦手なのも，一般教育というものの内容についてのあるべきイメージが曖昧なところに原因があるのではないかと思い始めた。

こう書いてくると，おまえは一般教育の存在意義について否定的な輩であるとレッテルをはられそうだが，少なくとも，自分が受けた一般教育には大いに感謝しているし，その思い出も多い。もっと正確にいうと，一般教育を受けていた頃の人的環境あるいは雰囲気に対して感謝しているし，思い出も多いということかも知れない。ということの中には，もちろん，一般教育を授けて下さった先生方がすばらしかったことも含まれている。

特に，歴史学のスタッフは，大学院時代の仲間からうらやましがられるほど，日本史，東洋史，西洋史いずれも，すばらしかった。歴史の勉強をしようか，フランス文学をなめてみようかと迷っていた私に，歴史に進むべきだとアドバイスしてくれたのは，これらの先生方の講義であった。国文学も，自然科学概論も，フランス語も，中国語もおもしろかった。自分の講義などは全然比べものにならないと失望したり，私も年季を積めば，同じようになれるだろうと勝手な希望的観測をして，自分をなぐさめたりしている。

そんなわけで，69年の大学〝紛争〟の頃